

2026年1月4日 第二礼拝

説教題『その恵みの言葉を』使徒言行録14章1～7節

主任牧師 加藤 誠

「主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。」(使徒言行録14章3節)

「2026年、主にあって明けましておめでとうございます」。元旦礼拝でもお話ししたように、暦が新しくなったから「おめでとう」ではなく、「主にあって、主の恵みの内に、主の恵みの光に照らされて、どんな時も歩むことのできる幸い」のゆえに私たちは「おめでとう」と挨拶を交わします。この年末年始にも厳しい治療を受けている友、年明けに手術や検査を控えている友がおられますし、年末に愛する家族を御許に送った友がおられます。しかし、うれしい時だけでなく厳しく辛い時にも、主の恵みの光が私たちを確かに照らしている幸いを、一年の最初に覺えたいのです。

使徒言行録は主イエスの命の言葉がパレスチナから世界に向けて「外へ、外へ」と前進していく物語です。命の言葉はユダヤ教の壁を壊し、異邦人とユダヤ人との新しい関係をつくりだし、教会の体質を新しく変革していきます。キリストの言葉は私たちを新しい出会いに導き、私たちを新しい存在に造りかえる命の言葉だからです。この「外に向かう福音の矢印」をいただく私たち大井教会は、2026年をどのように歩むべきか。今年も毎週、聖書に聴いていく礼拝を重ねていきたいと願っています。

さて今朝は使徒言行録14章を開きました。13章でサウロとバルナバはシリアのアンティオキア教会から異邦人伝道に派遣されましたが、その第一回伝道旅行の一場面、イコニオンという町でのサウロたちの伝道の様子が報告されている箇所です。

この箇所からもわかるように、サウロたちが説く福音は聞く人たちに賛否両論を巻き起こしました。主に反発したのはユダヤ人のようですが、ユダヤ人の中にも喜んで福音を受け入れる人もいたし、異邦人でも反発を覺えた人がいたようですから、「ユダヤ人は反対で、異邦人は賛成」と安易な図式は当てはまらないようです。福音はいつも一人ひとりに問いかけ、応答を求めるのです。ただ、どの町でもサウロたちは激しい憎悪に取り囲まれました。このイコニオンでもユダヤ人たちは手に石をもって二人に詰め寄り、二人はイコニオンを後にしています。さらに読み進めると(19節)、イコニオンでサウロたちを追い出した人たちは次の町のリストラまで追いかけて行って人々を抱き込み、二人に石を投げつけ、半殺しの目にあわせています。

これだけの厳しい迫害の嵐に直面しながらも、サウロたちの伝道にかける熱く強い思いは微動だにしません。正直な所、もし自分が彼らの立場なら耐えられる自信はありません。神の喜ばしい知らせを語っているのにどうしてここまで憎まれ否定されなければならないのか。「もう勘弁してくれ！」と音を上げるのではないか。しかし驚

くべきことにサウロたちは「そこでも福音を告げら知らせて」（7 節）いくのです。

いったい、このサウロたちの勇気の源はどこにあるのだろうと、改めて 14 章を読み直してみました。そこで示されたのが 26 節です。「そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みにゆだねられて送り出された所である」。サウロたちは伝道に派遣されるにあたりアンティオキアの教会の人々に手を置いて祈ってもらったのですが、その時に「神の恵みにゆだねられた」のでした。これは非常に大切な言葉です。サウロたちは自分たちの伝道のため祈り続けてくれている教会の人々を知っていました。自分たちの力だけで伝道しているのではない。さらに自分たちを通して働かれる「神の恵み」を知っていたのです。そして 3 節です。「主は彼らの手を通して…その恵みの言葉を証しされた」（3 節）。この主語は「主」です。イコニオンの町で主を頼みとし勇敢に語ったサウロたちですが、彼らは最終的に「その恵みの言葉を証しするのは主ご自身である」ことを知っていた、信頼していた…ということでしょう。つまり、サウロたちは自分の力で相手を納得させたり、屈服させたりしようとしなかった。自分にできること、自分に託されたことを忠実にするけれども、その結果は主にゆだねていたということです。私などは、どこか自分の力でやろうとする。だからうまくいかず、相手が思い通りに納得してくれないと、心折れてしまう。それに対してサウロたちは強い意志で 120% 尽くすけれども、どこか軽やかです。結論を神さまにゆだねているからです。だから必要以上に力んでいないのです。2026 年、私たちもまた新たな思いで教会の福音宣教に心尽くしていきたい。しかしその時にいつも「働くのは主の恵みである」ことを覚えて、軽やかに、主の跡を従っていきたいのです。

昨年 6 月に福井教会の能登半島支援に参加させていただいた時、参加者の自己紹介で埼玉から参加した女性がこう語られました。「自分は恵子という自分の名前が好きではなかったけれど、ある牧師から『恵』という漢字の真ん中には『十字架』があるのでと言われてから、恵子という名前を大切に思うようになった」と。確かに「十字架を真ん中に思う」と書いて「恵」なのですね。また先日の朝の祈禱会である方が「知恵とは『恵みを知る』と書く。恵みを知ることがほんとうの知恵なのだ」と語られました。そうであるならば「十字架を真ん中に思い、十字架の恵みを知ることが、ほんとうの知恵なのだ」ということ。「主を畏れることは、知恵のはじめ」（箴言 1 : 3）とは「主の十字架の恵みを畏れ、知ることこそ、知恵のはじめ」ということです。

「経歴」というと、一般にはどの学校を出たとか、どの会社で働いたとかを書きます。しかしクリスチャンにとって大切なのは「恵歴」でしょう。一人ひとりの人生、この一年の歩みに刻まれた主の恵みの跡。主はこの 2026 年にも、新しい恵みを用意してくださっています。私たちの歩みの最終的な主語は「主」です。その主の恵みの業に期待して、ご一緒に新しい年を歩み始めていきましょう。